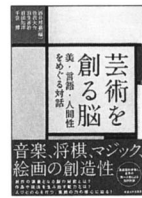


# Books 著者に聞く

学問も芸術も同じである。数学を愛する人も芸術を愛する人も、そこに「理」や「美」を見だし、感動を覚える。言語脳科学者、酒井邦嘉さんの言葉である。「数学を愛する人は、偉大な数学者が発見した数式を見て素晴らしいと思うものでしょう。そこに調和を感じたり、新たなアイデアがわいたりする。これはモーツァルトの素晴らしい音楽に感動する心と変わりません。音符の代わ

りに数式という言葉が使われているだけのことなのです。

芸術を創り出す人の頭脳とはどういうものなのか？ 異なる分野で活躍する4人と対話をもつことで、酒井さんはその秘密に迫った。対談相手は指揮者・曾我大介、将棋棋士・羽生善治、マジシャン・前田知洋、日本画家・千住博。「実はこの4ジャンルは皆、私自身がこよなく愛する対象です(笑)。その間には一見、関連



## 芸術を創る脳 美・言語・人間性をめぐる対話

酒井邦嘉 編、曾我大介、羽生善治、前田知洋、千住博 著  
東京大学出版会 / 定価(本体2500円+税)

性がないように見えますが、対話をしていく中で共通点が見えてきました。それが美・言語・人間性です。

酒井さんと曾我さんは高校のときオーケストラ部に所属。ともに音楽を奏でた仲であり、酒井さんはヴァイオリン奏者だった。「曾我さんは、制約があるからこそ芸術は生まれると言っています。何でもありという自由ではなく、制約の中に自由を見いだす。それが芸術を生み出す一つの条件になるのでしょうか。曲や演奏の様式という制約を学び、その上で創造的な表現をする音楽は、それ自体が高度な芸術体験になると酒井さんは語る。そして音楽がもつ多様性にも着目する。「自分と違う人や楽器があって一緒に響き合う。これが音楽だと思うのです。他者を認め合い、自分にはない能力を持ち寄って一つになる。その試行錯誤の過程から人間の生き方を学ぶ。このような機会が得られるだけでも学校の音楽の位置付けは大きいと思うのです」。

言語脳科学の視点で音楽をみれば、音楽は人間の基本的な能力に深く根ざし、人間の言語がもつリズムや構造を楽音で表現したもの、といえるそうだ。「言語では、言葉を介して心を伝えます。音楽も同様に声や楽器を使って心を伝えます。つまり心をどう再現するかが大事なのです。芸術性を高めることは、脳を創ること。生徒たちも音楽を通じて脳を創っていく。その効果がすぐには目に見えないからといって後まわしにしてもよいというものではありません。それはとても長い時間をかけて育まれていくものなのです」。

構成：伊藤ひさえ



『芸術を創る脳—美・言語・人間性をめぐる対話』を上梓した

## 酒井 邦嘉 さんに聞く

Profile  
さかい くによし ●言語脳科学者。1964年東京生まれ。1992年東京大学大学院理学系研究科博士課程修了、理学博士。東京大学医学部助手、マサチューセッツ工科大学客員研究員、東京大学大学院総合文化研究科助教授・准教授を経て、2012年より東京大学大学院総合文化研究科教授。2013年より同理学系研究科物理学専攻教授兼任。専門は言語脳科学および脳機能イメージング。

芸術性を高めることで、  
脳も創られる